

研究分野	飼育環境	機関・部	内水面研究所・調査研究部
研究事業名	日本一旨い！さくらます資源造成実証事業		
予算区分	研究費交付金(青森県)		
研究実施期間	H20～H21		
担当者	角 勇悦		
協力・分担関係	追良瀬内水面漁協・大畑町漁協・奥入瀬川鮭鱒増殖漁協		

〈目的〉

サクラマス資源の更なる増大を図るため、サケ飼育池の未使用期間にサクラマス稚魚を育成し、早期放流効果を検証するとともに、既存施設の有効利用を図る。

〈試験研究方法〉

1. 幼魚生産実証事業

県内3ふ化場(追良瀬、大畑、奥入瀬)のサケ飼育施設にサクラマス幼魚生産技術を導入して、春の稚魚期から秋の幼魚期まで飼育し、その飼育結果から事業化のための飼育管理マニュアルを作成する。

2. 放流効果実証事業

サケ飼育施設で飼育した秋幼魚に鱈カット及び個体識別用のリボntagを施標し、追良瀬川、大畑川及び奥入瀬川の3河川に各5万尾ずつ計15万尾を放流し、放流後の成長過程、スモルト化及び降海時期等を把握するための追跡調査を行う。

〈結果の概要・要約〉

1. 幼魚生産実証事業

秋幼魚生産にあたっては、各ふ化場ごとに図1の「降海型サクラマス(1+スモルト)の出現率を高めるための成長曲線(モデル)にそって給餌管理を行った。

追良瀬では、ほぼモデル体重に沿って体重増加が図られ、放流時点の10月で14.7gとなり、極めて順調に推移した。

大畑では、6月1.2gとかなり成長が遅れていたが、選別回数を増やして個体別の餌料配分を均等にし、また飼育水の加温を行い、放流時の10月には13.4gと適サイズに成長した。

奥入瀬では、春先から夏にかけて餌のやり過ぎにより体重が増えすぎたが、8月以降は給餌管理を徹底し、放流時には13.4gとなり適サイズで放流した。

2. 放流効果実証事業(0+秋放流調査：図2～4)

追良瀬川では10月8日～20日にかけて支流のオサナメ沢他に計5万尾を放流した。放流後の追跡調査では、PS(前期スモルト)は3月中旬、MS(中期スモルト)は4月上旬、LS(後期スモルト)は4月中旬から6月上旬にかけて現れ、降海盛期は5月中・下旬であった。

大畑川では10月28日～11月6日にかけて支流の葉色沢、湯ノ股川、小目名沢に計5万尾を放流した。追跡調査では、PSは3月下旬、MSは4月中旬、LSは4月下旬から5月下旬にかけて現れ、降海盛期は5月下旬であった。

奥入瀬川では、10月2日及び10月6日に支流の熊ノ沢川、後藤川、中里川に計5万尾放流した。追跡調査では、放流後2ヶ月目までは放流付近の河川内に多数留まっていたが、翌年1月以降は数尾程度しか採捕されず、3月上旬にPS2尾を採捕したが、それ以降MS及びLSは確認できなかった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

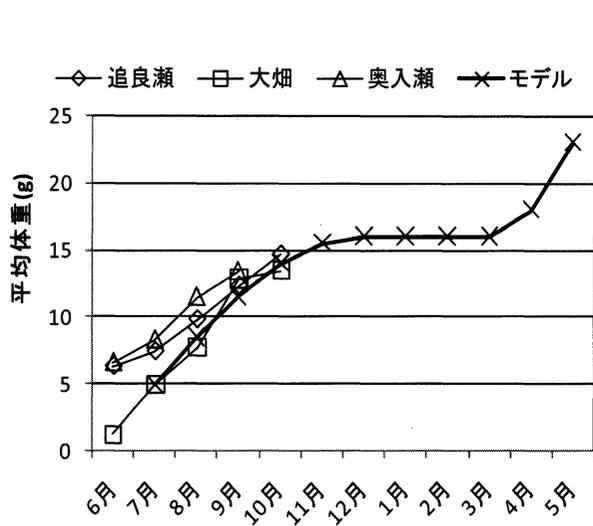


図1 ふ化場別体重推移

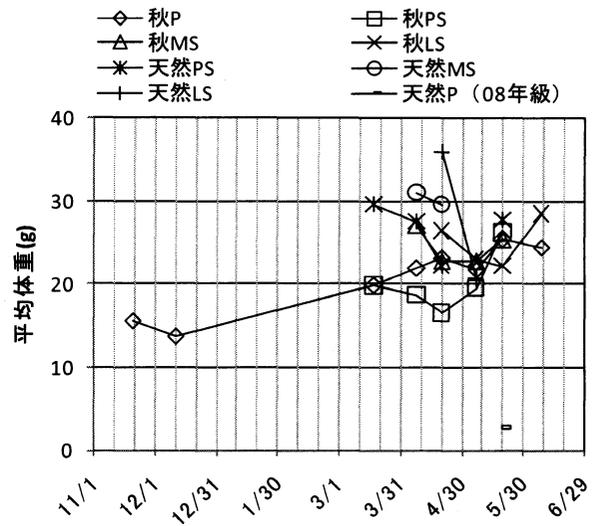


図2 追良瀬川スモルト出現状況

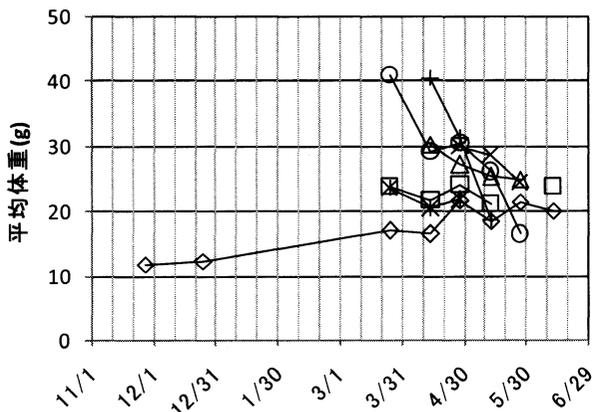


図3 大畑川スモルト出現状況

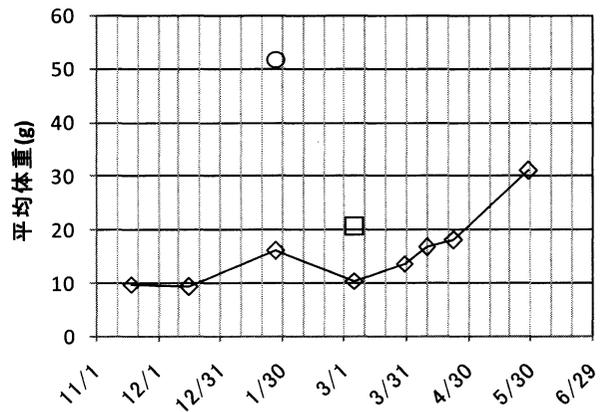


図4 奥入瀬川スモルト出現状況

〈今後の問題点〉

本事業は平成21年度で終了するが、平成20年に0+秋放流したサクラマス幼魚が平成22年の春から秋にかけて遡上するので、親魚の遡上状況を放流手法別に比較検討する必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

なし

〈結果の発表・活用状況等〉

特になし